The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アンリ・ベルクソンの進化論の再構成 : 組織化・個体化の概念に焦点をあてて
Author(s)	米田, 翼
Citation	大阪大学, 2021, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/81976
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　米田　翼　）	
論文題名	アンリ・ベルクソンの進化論の再構成―組織化・個体化の概念に焦点をあてて―

論文内容の要旨

本論文では、20世紀フランスを代表する哲学者アンリ・ベルクソン（仏, 1859-1941）の第三の主著『創造的進化』（1907）を主要な研究対象とし、（１）同書におけるベルクソンの進化論を組織化・個体化の観点から再構成し、（２）その存在論的な射程を再検討することを主眼とする。また、これらの目的を達成するために、同時代の生物学者の議論との照合によって、組織化・個体化をめぐる議論の詳細を明確化するというアプローチを採用する。

本論文は、序章＋各論全七章＋補論全二章の計一〇章から構成される。各論全七章のうち、上記の（１）の目的と関連するのは第二章から第六章であり、（２）の目的と関連するのは主に第一章と第七章（終章）である。また補論全二章は、ベルクソンの進化論や存在論の射程を検討するための判断材料となるように書かれている。

第一章：第一章では、新規性の創造・創発を擁護する哲学者たちの解釈を手がかりにして、ベルクソン自身とは別の仕方で、彼の進化論が提示する世界観・存在論の輪郭を下書きした。特に、イギリス創発主義の先導者であり、ベルクソンからの影響も色濃いサミュエル・アレクサンダー（英, 1859-1938）との相補的読解を通して、ベルクソンの世界観・存在論を「存在者を構成する素材（持続）の一元論」＋「現実主義」＋「成長宇宙説」の組み合わせとして特徴づけた。

第二章および第三章：第二章と第三章では、フェリックス・ル・ダンテク（仏, 1869-1917）との対立関係（第二章）、アウグスト・ヴァイスマン（独, 1834-1914）との影響関係（第三章）を解明する作業を通して、ベルクソンの個体論・老化論・遺伝論について詳細に検討した。その結果、有機体・個体・自然的システムという存在者を、次の三つの規定を満たすものとして特徴づけるに至った。

①. 個体性の共時的規定（個体性の肯定的規定）：個体とは、解剖学的基準と生理学的基準を同時に満たす複合的対象である。ここで、二つの基準は次のように定義される。

a. 解剖学的基準：構成要素となる諸部分が異質的である。

b. 生理学的基準：構成要素となる諸部分が担う機能が多様であり、かつそれら諸機能が相互補完的に連携する。

②. 個体性の通時的規定（老化）：個体とは、有限な持続間隔に存する（一定の期間だけ時間軸方向に延長する）複合的対象である。ここで、持続間隔の終点は、老化がもたらす自然死によって決定される。ここで、老化は次のように定義される。

a. 老化：老化とは、成長と同時に進行する過程であり、胚生の初期段階（誕生時）に与えられた発生・遺伝エネルギーが衰退していく過程である。

③. 個体間の通時的連続性（遺伝）：個体が存する持続間隔は、生命の連続的進展という長大な持続の部分である。ここで、諸々の持続間隔の連続性は、遺伝によって保証される。

これら三つの規定を満たすがゆえに、有機体・個体・自然的システムは、すでにできあがったものではなく、未完了の組織化・個体化の過程の先端に位置する存在者として捉え直されることになる。

第四章：第四章では、『物質と記憶』（1896）、あるいはハーバード・スペンサー・ジェニングス（米, 1868-1947）によるゾウリムシの無定位運動についての研究を参照しつつ、有機体・個体・自然的システムについて行動の観点から検討することで、ベルクソンの進化論における個体論・老化論・遺伝論の位置づけを問い直した。さまざまな論点が確認されたが、本論の大筋にとって重要なのは、まずは次の二つの論点である。

④. 生体と外界との一般的関係：すべての生体は、恒常的な作用・反作用の連鎖たるイマージュの総体、すなわ

ち物質界のただなかで、ひとつの作用（行動）の中心をなす。

⑤. 生体と外界との個別的関係：各々の生体は、(A) 受動的反応、(B) 受動的かつ能動的な反応、(C) 能動的反応というように、さまざまな程度で外界からの作用に働きかける。

また、(A) から (C) への発展は、有機体・個体・自然的システムが感覚−運動システムであるからこそ可能となっている。感覚−運動システムは、次のように定義可能である。

⑥. 感覚−運動システム：感覚−運動システムとは、個体性（個体性の共時的規定）の度合いに応じて、感覚と運動とのあいだに（時間的）遅延が生じるようなシステムであり、遅延が増大するにつれて、能動的反応を示すようになる。

本章の最後の節では、これらの論点を踏まえて、個体論・老化論・遺伝論・行動論の関係を改めて整理した。また第二章から第四章までの暫定的な結論として、一連の議論は現代の比較心理学（あるいは行動生物学）における「行動の多重因果性」と結びつけて理解できるのではないか、というアイデアを提示した。

⑦. 行動の多重因果性：生物の現在の行動は、直近の外的刺激だけでなく、(１) 生体の内的状態（個体性）、(２) 個体発生の歴史（老化）、(３) 系統発生の歴史（遺伝）といった複合的な要因によって決定されている。

ただし、ベルクソンの場合、個体発生要因（老化）や系統発生要因（遺伝）は、生物学的な種類のものにとどまらず、心理学的な種類のもの（個体の記憶、種の記憶、生命の記憶）も含む。それゆえ、ベルクソンにおける行動の多重因果性は、遺伝的制約よりも、むしろ遺伝的制約を打ち破るための理論であると言える。

第五章：第五章は、本論文の中核を担う。この章の主題は、二種類の適応概念、すなわち受動的適応（AP）と能動的適応（AA）である。まずは、APだけで進化を説明するテオドール・アイマー（独，1843-1898）の定向進化説への批判の内実を検討した。そこでは、ベルクソンが進化におけるAPの役割を全面的に否定しているわけではなく、生物の現在の状態・行動を決定する複合的な原因のうち、どれが深い原因なのか見定めようとしていることが確認された。

⑧. 進化の深い原因と機会原因（物質）：生命進化の深い原因は、個体発生要因（老化）と系統発生要因（遺伝）であり、とりわけ後者である。ただし、物質は機会原因の役割を演じる。

このように見てみると、従来の解釈ではあまり強調されてこなかったが、ベルクソンの進化論においては、適応概念が重要な役割を担っていると考えることができる。

後半部では、AAの内実の検討に向かった。そこでは、テクスト読解を通して、まずはAAの規定を「物質界の作用・反作用のただなかで、生物が自らに固有の行動可能性を獲得・拡張するにつれて、その器官の構造が複雑化すること」と読み替えた。また、エランと適応の関係を示唆するテクストに着目して、AAの成立には「本源的エラン（EO）からある一定のエラン（CE）を記憶にとどめる」といった事態が関与しているという解釈を提示した。

その後、APとAAに関する以上の議論を踏まえて、『物質と記憶』の再認論に遡行した。とりわけ、自動的再認を極限とする習慣形成の成立機序をめぐる議論に着目して、最終的には、次のような定式化を与えるに至った。

⑨. 能動的適応（または組織化）の内実：AA とは、生命が物質との関係においてある一定の行動様式・生存様式を組織する過程である。ひとたび組織された行動様式・生存様式は、種の習慣として次第に固定されていく。この意味において、AA は種レベルの習慣を形成する組織化の運動である。ただし、物質の側も絶えず変化するため、生命は各瞬間において AA をやり直す。この意味では、AA は新たな行動様式・生存様式を創造・発明する再組織化の運動である。

⑩. 能動的適応（または組織化）の原因：AP に終始せずに、AA が可能であるのは、老化や遺伝が示唆するように、生物の現在の行動に遠隔的過去（個体発生の記憶、系統発生の記憶、生命全体の記憶）が実効的に介入するからである。また、この遠隔的過去がアドホックな仕方で介入するのではなく、一定の方向に沿って介入するのは、遺伝によって種レベルの運動図式（ないし CE）が保存されているからである。さらに言えば、一方で物質の変化によって、他方で EO の保存によって、創造・発明がもたらされる。ここで、EO は、AA によって組織される行動様式・生存様式を絶えず再組織化する傾向として理解できる。

私の見立てでは、上記の⑨と⑩こそが、ベルクソンの進化論における生命進化の一般理論である。

第六章：第六章の主眼は、これまでの議論を踏まえてベルクソンの進化論を再構成しつつ、その存在論的射程を明確にすることである。前半部では、ジョージ・ロマネス（英，1848-1894）の進化論と対照することで、ベルクソンの進化論を特徴づけた。さまざまな相違点があるとはいえ、特に重要なのは、（１）本能と知性の関係、（２）両者の進化論の存在論的含意である。（１）ロマネスの場合は、「本能から知性への発展」というように心的活動の進化は明確な序列のある単線的進展として記述される。これに対して、ベルクソンの場合、「本能と知性への分岐」という

ように心的活動の進化は序列なき分岐的進展として記述される。さらに、ベルクソンの場合は、ウジェーヌ=ルイ・ブヴィエ（仏，1856-1944）のミツバチの屋外営巣の研究に依拠して、分岐が生じた後でも、本能と知性が相互補完的関係を結ぶことを強調する点が最大の特徴である。（２）こうした対立は、両者の存在論における意識の位置づけの違いに基づいている。ロマネス（または彼の共同研究者のコンウィー・ロイド・モーガン（英，1852-1936））の場合は、いわゆる中立一元論に相当する立場を自称しているのだが、実際のところは物質を基底とする強固な階層的存在論を措定している。これに対して、ベルクソンはある種の汎心論に接近し、意識を基底に置いた上で、その二重化の運動として生命進化を記述する。

後半部では、本章自体の主眼からするとやや付随的な論点ではあるが、諸傾向への分岐、あるいは意識の二重化と対応する事柄として、組織化の諸相を整理した。組織化の諸相とは次のようなものである。

⑪. 一階の組織化（生命進化の一般的目的）：一階の組織化とは、生命の一般的目的であり、生物界の全域（植物界も含む）に渡って観察される感覚−運動システムの組織化である。

⑫. 二階の組織化（完成された本能への傾向）：二階の組織化とは、一階の組織化の延長であり、超個体的な感覚−運動システムの完成へと向かう組織化である。ここで、超個体的な感覚−運動システムは次のように定義される。

a. 超個体的な感覚−運動システム：①個体性の共時的規定、②個体性の通時的規定、③個体間の通時的連続性をすべて同時に満たす感覚−運動システムであり、かつ複数の個体からなる集団である。（例：ミツバチのコロニー）

⑬. 再組織化（完成された知性への傾向）：再組織化とは、一階の組織化・二階の組織化から離れて、科学システムの完成へと向かう組織化である。ここで、科学システムは次のように定義される。

a. 科学システム：イマージュの総体（物質）それ自体に関連づけられたシステムである。

もっとも、これらは対立しつつも、実際のところは輻輳的に進展する。例えば、ミツバチの屋外営巣の事例が示すように、具体的な生物においては、本能と知性は混在している。このことは、完成された本能の典型例とされるミツバチにおいても、その背後で絶えず再組織化の運動が生じうることの証左でもある。このように、本章の後半部では、完成された本能と完成された知性における「完成」の内実（超個体的な感覚−運動システムの樹立と科学システムの樹立）を組織化・個体化の観点から明確化しつつ、ベルクソンの進化論を一貫して組織化・個体化の理論として読解する理路を示した。

第七章（終章）：第七章は、本論文の結論に相当する章である。そこでは、第六章までの議論を踏まえて、第一章で示しておいた「存在者を構成する素材（持続）の一元論」+「現実主義」+「成長宇宙説」の組み合わせとして、ベルクソンの進化論を特徴づけた。まずは、物質の持続に関する議論を踏まえて、持続の一元論の内実を確認し、次に、無秩序と無の観念についての批判的考察を検討して、現実主義的な立場が表明されていることを確認した。成長宇宙説については、第六章までの議論を通してすでに確認し終えているのだが、ベルクソンの地球外生命体（または生命存在指標）に関する思考実験を取り上げて、論点を捕捉した。

補論①：補論①は、アレクサンダーの時空の形而上学の概説ないし体系的読解を目的とする。特に、本文中では十分に議論できなかった時空論とカテゴリー論について詳細な説明を与えることで、アレクサンダーが一元論的な実在論を擁護することの意義を明確化した。なお、アレクサンダー哲学は、現代の分析形而上学における一元論、とりわけ優先性一元論にコミットする一部の論者に注目されはじめているのだが、補論①では、こうした動向についても触れている。それゆえ、本論文の第一章や第七章と、補論①をあわせて読むことで、ベルクソンの進化論の存在論的射程が検討できると思われる。

補論②：本論文で再構成したベルクソンの進化論は、ジルベール・シモンドン（仏，1924-1989）の個体化の哲学と接近する（組織化・個体化の概念に焦点をあてるからである）。両者の相違点について詳細に検討しようと思えば、大量の紙幅を費やすことになるのは想像に難くない。そこで、補論②では、きわめて限定的な仕方ではあるが、本論文の第二章と第三章と関連で、シモンドンの個体化の哲学における生殖概念の位置づけを明確化することによって、両者の相違点の一端を示した。なお、シモンドン研究では、ベルクソン研究以上に、個別科学との関係が明確になっていない。この観点から見ると、補論②は、シモンドンにおける生物学的個体化の理論の生物学的背景の一端を解明する試みとして位置づけることができる。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　米田　翼　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教　授	檜垣　立哉
	副 査	教　授	村上　靖彦
	副 査	准教授	森田　邦久
	副 査	外部審査委員	三宅　岳史

論文審査の結果の要旨

米田翼氏の論文は「アンリ・ベルクソンに進化論の再構成――組織化・個体化の概念の焦点をあてて――」と題されたものであり、19世紀末から20世紀初頭に活躍したフランスの哲学者アンリ・ベルクソンの主要著作である『創造的進化』(1907年)における進化論を、ベルクソンに間接的・直接的に関係のある生物学の進化論者や行動心理学者、現代的な進化の議論と対比させ、生命進化論の哲学としてのその意義を現代的な方向から再構成し、その意義を示すという壮大なものである。同氏の主眼は、とりわけベルクソンの影響を大きく被った､イギリスのサミュエル・アレクサンダーの思想をひとつの軸とし、ベルクソンからとりだされる生命論の体系を、一元論、現実主義、成長宇宙説という方向からまとめあげ、ベルクソンの議論と科学との関係を精緻に解き明かしたことに強い意義がみいだされる。全体は七章および、アレクサンダー論と、個体論の関係におけるシモンドンとベルクソンとの関係を巡る二つの論考が補論として付され、重厚なものとなっている。

序論においては､ベルクソンが進化論の形而上学的記述を『創造的進化』でなしたことによって、生物学界にもおおきな衝撃をあたえ、それに対してさまざまな反応がよせられた事情を、ジャック・モノーなどの議論を論駁するかたちで定位した。第一章では、そのような創造的形而上学として受け取られるベルクソンの進化論が、20世紀初期に､トンケディック、ロイド・モーガン、アレクサンダーなどの思想家や生物論者においてどのように評価され議論されてきたのかの系譜が辿られた。

続く第二章においては、とりわけ老化論において生物学上の功績のあるル・ダンテクの思想と、ベルクソンの思考との対比がなされ、ル・ダンテクが生命的に内在する死を認めず老化を細胞の交換と解し、死は事故死でしかないと主張するのに対し、ベルクソンの個体論の立場から個体の死の概念を主張していることが指摘された。第三章においては、遺伝学者として有名なヴァイスマンの議論を取りあげ、獲得形質の遺伝という微妙な問題に対して、ヴァイスマン的な議論のベルクソン独自の変更(偏差の遺伝)という議論を軸にその進化のあり方が辿られた。この二章において、個体とその生殖的継続についてのベルクソンのヴィジョンが強く打ちだされている。

第四章においては行動生物学者のジェニングスの議論がとりあげられ、『物質と記憶』という『創造的進化』に先立つベルクソンの記憶の議論から生命論への展開が詳細に論じられ、引きつづく第五章においては､今度は習慣形成という問題に関して生物学者アイマーを取りあげるベルクソンの方向を検討し、適応概念における能動性と受動性の問題に光が当てられた。これら一連の議論は、第六章での比較心理学者ロマネスの議論との対比において、能動的適応という意義がより一層強調され、ベルクソンの「未完了」に進化していく「現実性」の構成が際だたせられた。

第七章においては上記の総括が行われ、ベルクソン的な意味での持続の一元論・現実主義・成長宇宙説と整理されるベルクソンの生命進化論の再構成の説明がなされ、結論部を構成するものとなっている。

補論①においては、本論考全体において重要な役割をしている、ベルクソン主義者であるアレクサンダーが日本ではほぼ紹介されていないため、アレクサンダー自身の一元論的な時空の哲学についての生命がなされた。補論②においては、ベルクソンより後の世代における個体化論の有名な論者であるジルベール・シモンドンの個体化論との対比がなされ。その差異を提示することにより意義をより明確にした。

論文全体を通じて米田氏は、さまざまな生物学文献を解読しながら自己の思考を展開した『創造的進化』でもちいられている生物学者や心理学者、あるいはその影響をうけ、もしくは批判側にまわった生物学者や心理学者の議

論を、それらの原典に当たることにより精緻に読解し、その上で『創造的進化』を読解する形而上学的な道筋を、現代の生命的自己組織化論にも通じる仕方で整理し、再構成することに成功している。このことはまずは、生物学の哲学としてのベルクソンを正しく科学の言説との対応のなかに置きつつ、そこから形而上学を形成したベルクソンの意図に沿いながら、その思考を具体的に解明することに寄与しており、フランス哲学領域としての貢献のみならず、科学と形而上学的思考におけるひとつのモデルの形成としてもおおきな意義をもつことが確認された。

論文審査の結果、本論文は博士（人間科学）の学位を授与するのにふさわしいものと判定した。